



第 45 号
(年 4 回発行)
編集発行
弘前学院大 学
広報委員 会
印刷所
(有)小野印刷所

2011年

クリスマス礼拝と音楽の夕べ開催

12月15日、本学礼拝堂において、クリスマス礼拝が行われました。厳肅な雰囲気の中、多くの教職員・学生が集い、パイプオルガンやハンドベルの音に清らかな気持ちになりました。キャンドルの灯る中で、五所川原教会の川上清樹牧師から「暗黒に灯る光」と題してのメッセージをいただき、イエスキリストのご降誕を共に賛美し祝いました。



また、この夜6時30分より、第12回目の「クリスマス音楽の夕べ」が開催されました。ハンドベルの清らかな音色によって音楽会の幕が開き、楊尚眞宗教主任が聖書朗読と祈禱をされました。第一部は竹佐古真希先生によ

るパイプオルガンの独奏、油川悟さんによる『ドイツ歌曲』より4曲をバリトン独唱、コール・コモードの女声合唱による『クリスマス曲』や本学教授の笹森建英作曲の『美しい白神』が歌われました。



音楽の夕べ

「オラトリオ」の作曲者パシヴァル・W・ブカナンは、弘前女学校第6代校長メアリー・エマ・ウィルソンの長男であり、日本で生まれ、大正から戦前まで日本で宣教や教職につかれました。その間にこのオラトリオ全50曲を10年かけて作曲したものです。音楽会の企画を

していた頃に、偶然にも弘前学院の宣教師の足跡を調べられていた、元聖愛高校教諭の柏崎節子先生より、このオラトリオの存在を知らされました。今回は2曲選びました。作曲者の子息ドナルド・B・ブカナン氏(現在マサチューセッツ州在住)は、父の「オラトリオ」が祖母メアリーや大叔母にあたる9代校長アレキサンダー女史のゆかりの地、弘前、そして弘前学院で演奏されることを切望していたと聞きました。その願望に込めることができました。将来全曲をイースターの時期に上演できればと願っています。

音楽会の最後には、礼拝堂いっぱいの聴衆の皆様と共に「きよしこの夜」を賛美し、イエスキリストのご降誕をお祝いしました。(宗教部)

子どもの健康と体力

学長 吉岡 利忠



二〇一一年(平成二三)年八月一六日に日本学術会議、健康生活科学委員会、健康・スポーツ科学分科会から、「子どもを元気にする運動・スポーツの適正実施のための基本指針」が提言としてまとめられました。この提言は、子どもの健康・体力に関わる全ての個人・団体・学術団体・行政等の組織・機関に対し、ここで述べられている基

本指針の遵守の必要性を示しているものです。この提言作成に幹事の一人(日本学術会議連携委員)として携わりましたので、本紙面を借りて記載したいと思います。

さて、科学技術の進歩による生活全般の利便性の向上、都市化による空き地や遊び場などの縮小、少子化による遊び仲間の減少、塾や習い事による生活時間の変化等、挙げればキリがないほど子ども達を取り巻く環境が激変しています。また、恐ろしいことに、交通事故や誘拐などの犯罪の多発、最近では東日本大震災の影響も加わり、このような著しい社会環境の変化に

よって子ども達が思いっきり体を動かして遊ぶ機会が年々少なくなっています。安心・安全のために必然的に限られたスペースの家の中で遊ぶことを余儀なくされていることになりました。この現象は誰の目にも明らかで、本紙面を借りて記載したいと思います。

その結果、発育期の子ども達の動作発達や運動能力の低下、小児肥満や姿勢異常の増加、気力の低下などが問題になってきています。肥満や食生活の乱れによる小児糖尿病の増加も懸念するところです。青森県では、体格が全国トップクラスでも、全般的に肥満気味であり、肥満傾向児は男女5歳から17歳までほとんどの年齢層で全国平均を上回ると報道され、かなり気になるどころです。一方では、肥満とやせ体型との二極化も報道

されています。テレビや雑誌などの影響でしょうか、極端なやせ願望がその裏にあるように思われます。

心と体は表裏一体です。心と体の健康は社会の活力の源であり、将来を担うことになる子ども達のもっとも大切な要素です。この現状を改善するため、本分科会は、3年前に「子どもを元気にするための運動・スポーツ推進体制の整備」を提言し(二〇〇八(平成二〇)年八月二八日)、やはり関係する団体、スポーツ関係団体、政府諸機関、教育機関、指導者養成機関等に周知徹底をお願いしました。今回の提言は、それに続く第二弾であり、このような環境の中にあっても子ども達の健康をなんとかしてでも取り返し

本多庸一とキリスト教(19)

学校法人弘前学院 理事長 阿保 邦弘



■本多と菊池九郎

一八八九(明治二十二年)年大日本帝国憲法が公布され、翌二十三年第一回衆議院総選挙が行われた。

本多は、かつて青森県の県会議員として、次いで議長となつたわれ、政治家としての才能を十分に発揮して彼自身も政治への熱意に燃えていた。弘前教会の牧師、東興義塾の塾長、それに県会議員と、宗教、教育、政



菊池九郎 先生
津軽郡、南津軽郡、西津軽郡にわたり、定員一名と発表された。本多と菊池がそろっての当選は不可能なことがはっきりし

多とともに圧倒的な衆望を集め、開設されるべき国会に郷党を代表して打って出るべき候補の第一人者であり、しかも本多同様出馬すれば当選確実、意欲もまた十分であった。菊池は県議会議長から北津軽郡の郡長や県の課長などを歴任したうえ、明治二十二年に弘前が市制を施行した際に初代市長に当選していた。

一方、アメリカにあつて、祖国や郷里の動向を気にしていた本多の心境はどうか。明治三十七年の演説の中で次のよう

に述べている。「明治二十二年、憲法発布、翌年の国会開設のことなど米国の新聞にも大きく出た。私は以前覚えもあることとて自分でも大いにやってみようとの気もあつた。友人たちからは決意を促してくる。国元に問い合わせ、県庁にも紹介したら牧師という教職と議員とは両立せぬということから、どちらかを選ぶという二者択一に追い込まれ、数カ月大いに煩悶した。」

三区は弘前市、中津軽郡、南津軽郡、西津軽郡にわたり、定員一名と発表された。本多と菊池がそろっての当選は不可能なことがはっきりし

た。本多と菊池の間に何回も手紙のやりとりがなされた。菊池は言った。「君は元来宗教家よりも政治家の素質が大きい。現に君の送別会には政治家の出席が多かつた。来るべき国会には諸外国も注目している。外国の事情にも詳しい君が適任だ。大にしては国家のため、小にしては東北地方のためになることだ。ぜひとも君は立候補せよ。」

これに対して本多は「県には政治家たるものが多いが、宗教家として献身する者はいない。君は長らく政界に活躍し、手腕力量から代議士に最適だ。進んで立候補せよ。自分は一生宗教家で送るつもりだ。」本多が宗教一本の決意を固めるにあたって他の動機なども伝えられているが、この菊池との手紙のやりとりで見られる譲り合いが決定的なものであろう。(以下次号)

談話室

月の石

社会福祉学部 准教授 棟方 達也



日本時間1969年7月21日午前11時56分、アポロ11号...

かく私はあの瞬間を見届けることができた。月に人間が立っている！不鮮明な映像だったが、8歳の私にとってそれは驚嘆と感動の瞬間であり、42年経った今もその光景は記憶に刻まれている...

来た石ころがあった。あの時の光景もやはりはつきり脳裏に焼き付いている。それがである！昨年12月10日付で信じてたいニュースを目にしてしまった。NASAが管理しているはずの地球外物質試料...

である。録画技術が進歩し、鮮明な映像を何度でも再生できるとしても、その感動の瞬間や興奮した空気は、リアルタイムでこそ代えがたい価値となる。だから、どんなに夜遅くとも(朝早くとも)、その時見たいのである。その瞬間に立ち会い、「見届ける」のである。

研究紹介⑬

精神科救急・急性期状態の患者に 対処する精神科看護実践を考える

看護学部 准教授 岡田 実



現在、私が関心をもって取り組んでいる研究テーマは、一言でいいますと『精神科救急・急性期状態の患者に対処する精神科看護実践について』という...

通事故の現場に遭遇することがあります。事故現場を通り過ぎる際には「気をつけなくては！」と一瞬緊張します。不思議なことに、同じような事故が同じような場所で発生していることに気づくことがあります...

看護学部で開催されているリカレント教育は、地域の看護師、保健師、介護士の皆様をお迎えし、今年で7回目を数えます。例年、県内の医療機関を中心におよそ80箇所にプログラムを配布し、文字通り息の長い地域貢献活動として定着しました。

えましよう、三上聖治教授による「臨床実践に役立つ情報処理解習Ⅰ・Ⅱ」へと続き、最後に、福島裕子准教授(岩手県立大学看護学部)による「研究論文のまとめかた」で締めくくられました。九月十日、十月一日、十一月十二日の三回に分けて実施されましたが、開催日が土曜日の午後からであるにもかかわらず、教室は大勢の参加者の熱気であふれ、盛會裡に終了することができました。参加される皆様の意欲は、回を重ねることに増しているように思います。

このリカレント教育は、日頃地域住民の健康に携わっている医療・保健・福祉に従事している参加者によって支えられているフィールドで、地域住民へのケアをどのようにすれば高められるのか、また、提供されたケアが健康の回復に有効だったかどうか、皆様はこのような疑問を抱えて参加されています。参加者がそれぞれの看護実践に根ざした研究動機を携えて、参加しているといえるでしょう。また、参加することで曖昧になっていた研究動機や研究方法を明確にし、最終的には、論文にまとめる具体的な指導をリカレント教育に期待している、と当委員会は考えています。

看護学部 第7回 リカレント教育を終えて

看護学部リカレント教育委員会委員 岡田 実

看護学部で開催されているリカレント教育は、地域の看護師、保健師、介護士の皆様をお迎えし、今年で7回目を数えます。例年、県内の医療機関を中心におよそ80箇所にプログラムを配布し、文字通り息の長い地域貢献活動として定着しました。

看護研究は看護実践と深く結びついています。当学部のリカレント教育が『臨床実践に役立つ看護研究』を重視しているのは、看護研究が地域住民の健康回復と増進に役立ってほしいと願うからに他なりません。

櫛引美代子教授がみちのくふるさと貢献基金を授与

2011年10月、公益財団法人みちのくふるさと貢献基金(杉本康雄理事長)より、「平成23年度の教育・福祉・環境助成事業」の助成金が櫛引美代子教授(看護学部・母性看護学)に授与された。同基金は教育、福祉、環境分野において、地域貢献や健康増進などに関する活動を行う県内の個人、NPO法人、企業などを対象に助成するもので、応募37団体の中から12団体が選ばれた。櫛引教授らは「妊娠中の女性とパートナーおよび家族のための出産準備クラス」の活動に対して贈られたものである。

櫛引教授らは、本学において、2010年度から「両親学級」を開催し、地域社会に生活する妊婦とパートナーおよび家族が出産・子育ての知識や技術を学ぶ機会を提供し、好評を得てきた。今年度も両親学級を4回開催、それぞれ2、3、6組の受講者があった。妊婦のみならず、妊婦の実母や妹が支援家族として参加した。前年度と同様に、工藤優子講師がインストラクターを務め、妊婦疑似体験、育児体験などを含むプログラムである。妊婦が受診している医院の助産師によると、「この両親学級で体験実習をした父親は赤ちゃんの抱き方やおむつ交換などを習得している、育児疑似体験の成果がみられた」とのことであった。櫛引教授らは「今後も本学において両親学級を継続し、外国人(も学級の場の提供、出張両親学級など、拡大していきたい」と抱負を述べた。(広報委員 片桐)

2011(平成23)年度『ヒロガク教養講話』・『特別講話』

Table with columns: 開講日, 担当者, タイトル. Lists various lectures and speakers.

Table with columns: 特別講話, 担当者, タイトル. Lists special lectures and speakers.



親学級を継続し、外国人(も学級の場の提供、出張両親学級など、拡大していきたい」と抱負を述べた。(広報委員 片桐)

クラブ紹介

弘前学院大学軽音部

文学部三年 松橋 紫里

私達は、大学の文化祭のステージでのバンド演奏や、大学内ミニライブ、弘前市内のライブハウスをお借りしての企画ライブを中心に活動しています。大学内ミニライブは、本学4階にある414講義室を使ったミニライブで、主に学内の学生たちが足を運んでくれます。4月には新入生歓迎ライブを予定しております。文化祭では毎年、体育館でのバンドステージの他に、軽食の出店をしています。二〇一一年度はお好み焼きとから揚げを出店しました。文化祭

はバンドステージもあり、出店もあるので多忙になりますが、その分、部員同士の仲が深められます。市内ライブハウスでの企画ライブは、ライブハウスの本格的な機材を使わせていただくいい機会です。音響機器の取り扱い方を学ぶとともに、自分たちの演奏を沢山のお客さんに聞いていただくことで、その反応を見て自分の目標を見つけることができます。私達は毎週月曜日から土曜日まで本学4階の414講義室で練習を行っています。部員

はさまざまなジャンルの音楽好きが集まっているので、コピーバンドやオリジナルバンドなどを、部員同士が各自で声を掛け合い、メンバーを集めてバンドを結成しています。アコースティックギターやピアノでの弾き語りもしています。機材はギターアンプが2台、ベースアンプが1台、ドラムセットが1セット、マイクが2本とPA機材が1台あります。まだまだ機材は少ないのですが、部員の意見を取り入れて徐々に増やしていく予定です。現在、部員数は約40名で、経験者から初心者までいます。自分のやりたい楽器を自分のペースで練習して上達していくのもこのサークルでの楽しみの一つです。作も教えます。これが茶道部の活動です。



す。バンド演奏だけでなく、部員同士で好きな音楽の話をしたり楽器の演奏の仕方や機材について語りあったり、このサークルでしかできないことがたくさんあります。ぜひ私達と音楽のある毎日を送っていきましょう。二〇一一年度オープンキャンパスは七月二三日、八月二〇日、九月一七日、一〇月九日の四回に渡って開催いたしました。参加者延数は高校生一三六名、保護者七七名、合計二二三名となりました。

二〇一一年度オープンキャンパスの概要

二〇一一年度オープンキャンパスは七月二三日、八月二〇日、九月一七日、一〇月九日の四回に渡って開催いたしました。参加者延数は高校生一三六名、保護者七七名、合計二二三名となりました。オープンキャンパスでは、各学科の特色を生かした「模擬講義」、「体験実習」、「在学生レポート」、全学科共通の「小論文講座」、そして毎回恒例の「在学生との懇談」、「保護者説明会」、「キャンパスツアー」など、趣向を凝らした企画で参加者を迎

かけになります。近年は、インターネットや携帯端末で大学の情報や入学試験に関する情報を収集することが容易になりました。そのため、たくさんの大学を比較する視線がシビアになっています。そのような状況下で、本学に



興味を持ち、足を運んでくれる高校生を大切にすることがオープンキャンパスの意義であることと踏まえ、今後の計画に取り組んでいきます。各学科担当教員および学生スタッフのご尽力に、心から感謝申し上げます。 (入試広報センター 小山内)

クラブ紹介

茶道部の一年間

文学部三年 奈良 真実

こんにちは。弘前学院大学茶道部です。今回、茶道部を紹介する機会をいただいたので、普段はなかなか話せない私達の活動を紹介します。

私達の活動の流れは、前期は新入部員に茶道の基本的動作を教えることを中心に活動し、夏休みからは学祭に向けての稽古に力を入れます。私達は一年間の行事の中で、学祭で催すお茶会に最も力を入れて活動しています。それは、運動系のサークルの試合や大会と同じで、学祭が私達の日頃の成果を発揮できる行事だからです。そのため、学祭が近くなると、候補の主力を自分達で買ってきて、見た目、食べやすさを検証するなど、自然と力が入ります。

指導して下さる齋藤晴美先生は、私達が作法を間違えるとその場でやり直すように言います。そのままにしておくと、間違えたままの作法が身につけてしまい、直すことが難しくなるからです。そのお陰で入部するときに茶道の経験が全くなかった部員も、十月の学祭までにはきちんとした基本の動作ができるようになっています。学祭が終わると、今度は四大学合同茶会に向けての練習に入ります。四大学合同茶会とは、弘前市内の四つの大学の茶道部が合同で催すお茶会です。また、それまで新入部員には、水屋の仕事と客として茶室に入る時の作法だけを教えていましたが、客の前でお茶を点てる亭主の動

茶道部の部員は現在九名。一時は存続できないのではないかと心配したこともありましたが、茶道部は部員だけで成り立っているではありません。しかし、茶道部は部員だけでなく、学祭のお茶会に毎年来て下さる方や、他大学の茶道部の皆さんなど、多くの人に支えられて今日まであるのだと思えます。茶道部を支えてくれる多くの人に感謝しながら、これからも活動していきたいと思えます。

二〇一一年十二月十七日(土)、本学一号館一五教室において東北大学東北アジア研究センター教授の平川新氏を講師に招き、講演会が開かれた。ここに、その内容を簡単に紹介し、若干の感想を述べてみたい。

平川氏が理事長を務めるNPO宮城歴史資料保全ネットワークでは、二〇〇三年の宮城県北部地震直後から、個人宅に伝来する歴史資料の救出活動を行っている。緊急時の資料救出だけではなく、既に予見されていた東北地方を震源とする大規模地震に備え、歴史資料を伝える旧家の同意を得て、史料の整理、写真撮影とデータ化、複数データを複数箇所に保存するための活動も進めてきた。昨年三月の大震災においても、活動の過程で把握されていた資料の救出に尽力し、現在でもその活動は続けられている。

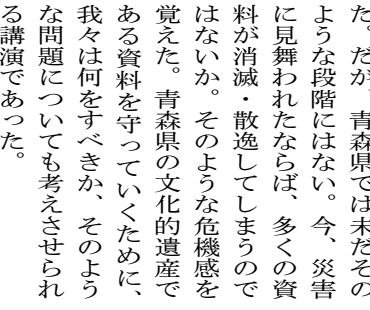
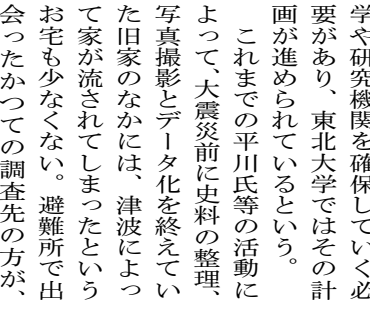
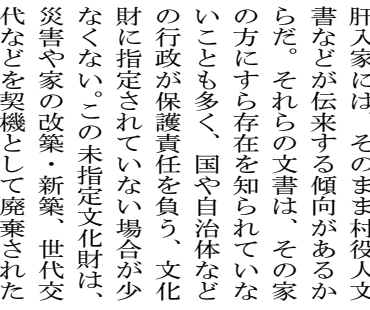
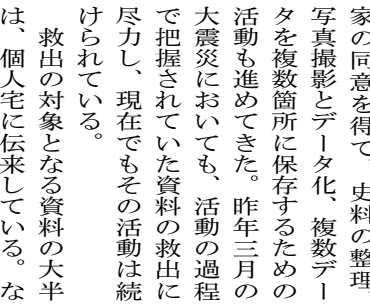
救出の対象となる資料の大半は、個人宅に伝来している。な

り、古書店へ流出するなど常に消滅・散逸の危機にさらされている。そのため、丁寧な所在確認や保全活動を行っていく必要がある。今回は、特に東日本大震災後の資料救出に特徴的なあり方や今後の課題についても報告された。例えば、津波による汚泥被害にあった史料の洗浄方法や一時保管方法などが、奈良国立文化財研究所等の技術協力によって進められたとのことであった。また、今後は国内各地の原発事故に備えて、歴史資料データの保管場所として、国外の大学や研究機関を確保していく必要がある。東北大学ではその計画が進められているという。

平川氏に語ったという言葉が印象的だった。「津波ですべてを失ってしまいました。古文書も失ってしまいました。しかし、みなさんのおかげで、古文書の写真だけは残りました。ありがとうございます。」

おそらく、これから被災地域が復興活動を進めて行く上で、救出された史料は被災された方々や地域の力になっていくものと思う。

この大震災を機に、福島県や茨城県などでも歴史資料保全ネットワークの活動が開始された。だが、青森県では未だそのような段階にはない。今、災害に見舞われたならば、多くの資料が消滅・散逸してしまうのではないかと、そのような危機感を覚えた。青森県の文化的遺産である資料を守っていくために、我々は何をすべきか、そのような問題についても考えさせられる講演であった。



第4回

ヒロガク福祉創造フォーラム

実行委員長 社会福祉学部二年 齋藤ひかる



第4回 ヒロガク福祉創造フォーラム開会式

二〇一一年一月六日(日)、本学社会福祉学部主催である第4回ヒロガク福祉創造フォーラムが開催されました。今回は、「身近なライフサポート地域に根ざした支援」がテーマでした。当日は本学学生、教職員の他に、福祉の現場で働く方々や地域の方々、本学卒業生、全体で約二〇名の方々が会場に足を運んでくださいました。

午前には基調講演が行われ、基調講演者は、社会福祉士の成田全弘さん(藤崎町社会福祉協議会事務局長)に「身近なライフサポートとは」と題してお話していただきました。続いて、会場の体育館にて施設販売が行われました。この施設販売では、エイブル、大石の里、さくら園、ゆいまる、の四施設に出店のご協力をしていただきました。手作りのおいしいパンやクッキーなどを販売していただき、昼食時は多くの人で賑わいました。

午後は、現場の方と一緒に「社会福祉の古典・名著を読む」というテーマでワークショップが行われました。川村和康さん(地域生活支援事業所すみれ所長)が「精神保健福祉士」に助言者として参加していただき、生江孝之(1867~1957)の名著「日本基督教社会事業史」を読み進め、基督教社会事業の諸問題と将来への展望などについて理解を深めました。続いて、「津軽地域における民生委員の姿」と題して実行委員が民生委員にインタビューした際の報告をしました。次に「私たちにできる支援について考える」と題して社会福祉実習やボランティア活動で考えたことについて学生発表が行われました。発表者は、児童福祉分野から佐藤大介さん(社会福祉学部三年)、障がい福祉分野から藤田菜摘さん(社会福祉学部二年)、老人福祉分野から佐藤知美さん(社会福祉学部三年)に発表していただきました。最後のプログラムには、ディスカッションと小グループ

セッションには、学年・学部を問わず学生およそ四十名、教員十名の来場者を迎えることができました。実習生が博物館の事業・運営、展示、資料の扱い方についての経験を提示しながら、参加者からも関連する博物館、まちづくり、当該地域の歴史や文化についての情報が加えられる...といった、和やかな知的交流の空間となりました。

「表現技術コンテスト」(旧名称「文章コンテスト」)は、文芸部の学生を対象に、様々な表現技術のレベルを競うコンテストです。今年度はレポート部門、エッセイ部門、翻訳部門(a英文和訳、b津軽弁訳)についてコンテストが行われ、厳正な審査の結果、以下の方々が各部門の一位「優秀賞」に輝き、賞状と記念品が贈られました。(エッセイ部門に応募が無かったため、「最優秀賞」は選考せず)なお、受賞作品は近々、「総町リーフレット」として刊行の予定です。

「表現技術コンテスト2011」表彰式
去る12月20日、学長室において行われた表彰式

2011年度 弘前学院大学学位記授与式
・文学部 第三八回
・社会福祉学部 第一〇回
・看護学部 第四回
・大学院社会福祉学研究所 第八回
・大学院文学研究科修士課程 第六回

ポスター・セッション企画

文学部 学芸員資格担当 生島 美和

本学では、学芸員資格の取得のための博物館実習成果報告を、昨年度より「ポスター・セッション」という形式で行っています。ポスター・セッションとは、発表者が、自身の発表内容をポスターにまとめ、掲示し、これに基づいて説明を行うとともに、参加者から個別に質

疑を受けたり討議を行い、相互の学びを深めようとする、プレゼンテーションの方法のひとつです。学芸員資格課程で四年次に実施する博物館での現地実習は、実習館の規模や特色、収蔵資料の種類などに応じて実施されており、そこで実習生が経験した学びことも様々です。それらの経験の交流にあたり、自らの実習成果をポスターとして資料化し、展示することは、まさに課程を通じて学ぶ手法と言えます。さらに近年の博物館は、来館者や地域住民との情報交換や討議を通じた「学びの場」となることも求められてきています。したがって実習生が協力してセッションの場をつくり、経



験を語り、質疑に応じ、コミュニケーションを展開するといった「学びの空間」を創造することもまた、実習の一環であると考えています。本年度は弘前市立博物館、青森県立郷土館、青森県立美術館、中泊町博物館、十和田市立現代美術館、青森市中世の館、秋田県立近代美術館に、10名の実習生が行きました。決して多くない実習生の人数に対し、十一月二十九日に開催したポスター・



われしました。基調講演者は、社会福祉士の成田全弘さん(藤崎町社会福祉協議会事務局長)に「身近なライフサポートとは」と題してお話していただきました。続いて、会場の体育館にて施設販売が行われました。この施設販売では、エイブル、大石の里、さくら園、ゆいまる、の四施設に出店のご協力をしていただきました。手作りのおいしいパンやクッキーなどを販売していただき、昼食時は多くの人で賑わいました。

午後は、現場の方と一緒に「社会福祉の古典・名著を読む」というテーマでワークショップが行われました。川村和康さん(地域生活支援事業所すみれ所長)が「精神保健福祉士」に助言者として参加していただき、生江孝之(1867~1957)の名著「日本基督教社会事業史」を読み進め、基督教社会事業の諸問題と将来への展望などについて理解を深めました。続いて、「津軽地域における民生委員の姿」と題して実行委員が民生委員にインタビューした際の報告をしました。次に「私たちにできる支援について考える」と題して社会福祉実習やボランティア活動で考えたことについて学生発表が行われました。発表者は、児童福祉分野から佐藤大介さん(社会福祉学部三年)、障がい福祉分野から藤田菜摘さん(社会福祉学部二年)、老人福祉分野から佐藤知美さん(社会福祉学部三年)に発表していただきました。最後のプログラムには、ディスカッションと小グループ

セッションには、学年・学部を問わず学生およそ四十名、教員十名の来場者を迎えることができました。実習生が博物館の事業・運営、展示、資料の扱い方についての経験を提示しながら、参加者からも関連する博物館、まちづくり、当該地域の歴史や文化についての情報が加えられる...といった、和やかな知的交流の空間となりました。

「表現技術コンテスト」(旧名称「文章コンテスト」)は、文芸部の学生を対象に、様々な表現技術のレベルを競うコンテストです。今年度はレポート部門、エッセイ部門、翻訳部門(a英文和訳、b津軽弁訳)についてコンテストが行われ、厳正な審査の結果、以下の方々が各部門の一位「優秀賞」に輝き、賞状と記念品が贈られました。(エッセイ部門に応募が無かったため、「最優秀賞」は選考せず)なお、受賞作品は近々、「総町リーフレット」として刊行の予定です。

「表現技術コンテスト2011」表彰式
去る12月20日、学長室において行われた表彰式

2011年度 弘前学院大学学位記授与式
・文学部 第三八回
・社会福祉学部 第一〇回
・看護学部 第四回
・大学院社会福祉学研究所 第八回
・大学院文学研究科修士課程 第六回

2011年度 弘前学院大学学位記授与式
・文学部 第三八回
・社会福祉学部 第一〇回
・看護学部 第四回
・大学院社会福祉学研究所 第八回
・大学院文学研究科修士課程 第六回

第2回 英語弁論大会開催

文学部 英語・英米文学科長 佐藤 和博

2011年11月10日、11時15分から、弘前学院礼拝堂にて弘前学院大学英語英米文学会主催の第2回英語弁論大会が開催されました。この大会の目的は、第一に、本学学生の英語能力(会話力、文法、文章力)を向上させる事であり、第二に、多くの学生が英語学習に励み、より高いレベルの英語能力を身につける事。また発表者が与えられた課題に対する考えを深め、その考えを分かち合い共に学ぶ事にあります。

今年度は「あなたの大学生活における重要な経験について(An important Experience in your university life)」という課題で、大学院生から大学1年生まで、10名の学生が日頃の成果を競いました。各自4分から5分の発表時間のなかで、出場者はベストをつくして発表しました。

本学の吉岡利忠学長及び、本学の英語クリニック指導者、Eymeric Widling先生が審査委員として、出場者のスピーチを採点しました。審査基準としては、内容、英語の流暢性、発音などが重視されました。

入賞者及び参加者全員に、吉岡学長より賞品が手渡されました。入賞者は以下の通り。金賞、猪股弓依(英語・英米文学科4年)。銀賞、



平川麻衣子(同2年)。銅賞、工藤光平(同2年)。

また入賞者3名のスピーチは、『弘前学院大学英語英米文学』第35号(2012年3月発行予定)誌上に掲載される予定になっております。

卒業礼拝
日時: 二〇一二年三月十六日(金) 午前一〇時
場所: 礼拝堂
*礼拝終了後、体育館において学位記授与式のりハールを行う。